

に擢でられ、同年十月古社寺保存會委員に擧げらる。三十一年八月十一日復び本校に入りて教授となり、高等官六等に敘せられ、同じき年九月正七位に敘す。卅三年十二月高等官五等に敘せられ、越えて翌卅四年四月從六位に敘せらる、本年六月二日俄然腦溢血症に罹り、療養手を盡すと雖、遂に其効を奏せず、溘焉不歸の客となる。卒するの前、朝廷其殊功を嘉し、特旨を以て、位二級を進め、從五位に敘し、勲六等瑞寶章を授けらる。蓋し異數なり。

先生の繪事の重なるものを擧ぐれば、明治十二年外務省の依託を受け、外國人饗應に供する、本邦古畫の諸圖を摸寫したるあり。十三年宮内省より、後醍醐天皇御自畫御影の摸寫を命せられたるあり。又十五年十月十一月及十七年五月には、共進會へ行啓の節御前畫を勤め、十七年第二回博覽會に出品しては銀章を受け、十九年皇居御造營に際しては命を承けて、皇后陛下御座所御床側御地袋戸及周圍の杉戸に、得意の筆を揮ひ、後復たひ御常用に係る、御歩障に、加茂祭の圖を畫けり、此他帝室博物館には、先生の摸寫したる古畫尠からず、或は原畫より優るものありといふ。其先生の作品逸話の如きは、更に記述する所あるべし。

先生資性敦厚にして溫雅、恬淡にして懇篤、利を求めず、争ふを好まず、諸生を導くや、諄々として倦まず。衆人に接するや、親疎を以て律せず。頗る古君子の風あり。少壯より酒を嗜み、晩年中風の兆ありてより、其害を知り、自ら戒飭したるも、遂に其病の爲に卒す、惜むべし。六月十四日、遺言を以て、四谷區南寺町の龍泉寺に葬る。本校職員卒業生生徒にして、葬儀に會するも

の、貳百名に近く、此他先生生前の知己故舊の會するもの、亦數百名なりしといふ。以て先生の世人に尊重景慕せられたるの深きを推知すべきなり

明治壬寅歲六月廿日 辱知 屋代晁江誌

なお、制作歴に関しては塩田英五郎編『大和絵師山名貫義略年譜』（平成二年六月）がある。

#### ⑭ 『作品集』の発行

明治三十五年七月二日の卒業式の後十日間生徒成績展覧會が開かれたが、同年十一月、校友會はこの展覧會の図録『作品集一』を画報社より発行した。故山名貫義、教授の川端玉章、荒木寛畝、寺崎広業、助教の岡田秋嶺の作品、本年の卒業制作（図画講習科の分を含む）平常成績中の秀作の写真が掲載されている。卒業制作の記録でこれ以前のものとしては明治三十三年作成の「東京美術学校生徒卒業制作作品」と同三十四年作成の「東京美術学校卒業制作写真」（本学附属図書館蔵）があるが、これらは単なる写真貼込帖である。『作品集』はこれ以後逐次刊行された。刊行状況は巻末の「東京美術学校・同校友會出版物一覽」に記載する。